
君も僕の流星

乾 弘毅

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君も僕の流星

【Nコード】

N0701Z

【作者名】

乾 弘毅

【あらすじ】

たとえ理不尽でも彼女の大事なお兄ちゃんであるかぎり逆らえない。でもそのせいで浮気の濡れ衣を着せられて口もきいてもらえなくなってしまうた。おまけに僕には言わない好きって言葉を他の人になら言えるらしい。…なんかイロイロしょくでよくわかりません。君は僕の輝ける星。から3年後、君は僕の流星。の裏話。好きでも意外と分かり合えてないし、誰だっておかしいのは自分以外のほうだと思ってるよねー、みたいな。

うちの母親より理不尽な人間っていたんだ。

佐倉孝明を見てるとつくづくそう思う。

絶妙なタイミングで絶妙な分量の言動をすることで、まわりを都合良く利用する。

恋人の大事なお兄ちゃんでなければ絶対かわらない。

「今後の日曜日のこと、遥はなんか言ってた？」

携帯から目を離すことなく聞かれた。

「…斉藤さんと約束したから遠出してきますって」

「ふうん。ま、嘘は言ってないな」

すごく嫌な予感がする。

でもここで彼のペースにのせられたら負けだとも思う。

「高田編集長の遥ちゃん通信によると、斉藤さんのお兄さんの二セ彼女として、お兄さんの大学の文化祭に4時間レンタルされるらしいけど」

この兄にしてこの妹あり。

…嘘は言わないけど騙したんだね？

「どうする？」

にやり、とこちらに携帯を差し出す彼にできるだけ無表情な顔で「どうもしません」と言い放った。

不必要な嫉妬からこの件をつつきまわしたら、僕にとっても不都合な事実がボロボロと出てきてしまうだろう。

例えば、遥ちゃんと付き合いだしてからずっと佐倉孝明に良いようにされっぱなしで、3年前から佐倉家ご用達の合気道道場の会員にさせられているうえに、この1年間は佐倉孝明と高橋賢太が講師を勤める女性向け護身術教室でアシスタントをやらされていることや、

そこで高田くんからのメールで知らされる遙ちゃんの最新情報を一緒にチェックしてしまっていることなどなど。

高田くんは遙ちゃんの同級生で、バスケットだった佐倉孝明の後輩だ。僕のひとつ下の遙ちゃんが志望した高校が進学校としてはめずらしくバスケットが盛んであったことから、彼も同じ高校を志望した。

けれど、本当なら高田くんの学力では合格するのは難しかっただろう。

佐倉孝明と高橋さんと僕とがつきつきりで勉強をみてやってなんとか合格することができた。

彼が遙ちゃんのそばにいたほうがなにかと便利なのは言うまでもないことだ。

合格発表の後、高田くんのお母さんに感謝されて感じた罪悪感を、僕はいまだに忘れられない。

「優也はいい奴だなあ」

嬉しそうに佐倉孝明が笑う。

「俺も賢太もその日ははずせない用事があって様子を見に行けないから助かったよ」

用事がなければ見に行くつもりだったのか？

どんだけ過保護なお兄ちゃんなんだ。

そしてどうもしないって言った僕の言葉はスルーか？

おまけに高橋さんにまで、

「遙は物凄い方向音痴で、とくに帰り道では必ず左右を間違えるからなるべく目を離さないでやって」

と頼まれてしまった。

高橋さんは佐倉孝明の親友だが、なぜこんな人が存在するんだ？と思うくらいに善良で、それでいて人間くさいところもある、地に足のついたまっとうな人物。

佐倉家とは家族ぐるみの長い付き合いで、遙ちゃんにとっては2人目の兄と言っても過言ではない。

むしろ高橋さんが唯一の兄であればどんなに良かったか。

でも遙ちゃんが方向音痴だなんて初めて知った。

いつも誰かが付き添っているようにしないと回収が大変ってどんなレベルだ？

過保護にされているのにそんな裏事情が隠されていたなんて……。すっごくカワイイけど。

オネエ疑惑をかけられているという斉藤さんのお兄さんと腕を組んで歩く後ろ姿を見ていると、やっぱり好きだと思いきらされる。

可愛くて賢くてちよつとズルくて優しくて頑張りやで抜けてて付け込まれやすく流されやすく、付き合いだしてから3年もたつのになぜかいまだに1度も好きだと言ってくれたことのない僕の恋人ずっとそばにいられるならそれでもかまわない。

本気でそう思う。

迷子になっても助けてほしそうにするまで待つようにと言われていたのに、大学を出たとたんにあさつての方向に曲がった遙ちゃんにすぐ電話をかけてしまった。

だって左右を間違うどころか必要もない場所を曲がるとかカワイすぎ。

道を間違えたなんて気づきもせずに電話に出た遙ちゃんのカワイさに悶えつつ呼吸を整えた。

「ずいぶん楽しそうだったね」

「なんのことですか？」

ぷちっ。

っー。

電話が切れた。

いや切られた。

お客様がおかけになった電話は…のアナウンスに呆然とした。
はっ！と気づいて遙ちゃんの曲がった道に急いだけど遅かった。

…逃げられた。
なんで？

自分が迷子だと自覚した遙ちゃんが泣きながら電話してくるまで30分。

びつくりするくらいややこしい場所にいた遙ちゃんを回収するのにさらに20分。

…疲れた。

遙ちゃんも疲れたんだろう。僕の部屋で休んでいるうちに寝てしまった。

しかし高校生が迷子になって目が腫れるまで泣きじゃくるとかカワイすぎ。

おまけに泣きつかれて寝るとかカワイイにもほどがある。

規則正しく呼吸を繰り返す寝息まで可愛くてキスしてしまうけど、寝ぼけてるのか小さく身じろぎしただけでされるがままになっている。

はふ、とか吐息はいてるし。

やばい。理性が吹っ飛ぶ寸前だ。

背中だけ、と自分に言い聞かせながら素肌に触れた。

「っん…あ。せ…んぱ…い…？」

やばい。聞いたことない声が出た。

やんわりとシャツを掴むとかマジやばい。

いろんなとこにいるんなものを入れたくなるし。

完全にやめどきを失いました。

「先輩はなんであんなところにいたんですか？」

できればいきなりしらふにもどらないで欲しかった…。
ていうかばれた？

なんかすごい怒ってます。

怒ってる遙ちゃんとか初めて見た。

目力が十倍増しで空気まで揺れててびっくりな美しさです。
怒ってる顔が綺麗ってどんなクオリティーだ。

「女の人といたんですか？」

…？

どゆこと？

なんかとんでもない誤解がうまれたらしいと気づいたときには遙ちゃんはいなかった。

「着信拒否指定なんだって？」

「笑い事じゃないですよ？もう1週間以上も声が聞けてないんですよ？完全な濡れ衣を着せられているんですよ？」

それもこれもお前のせいだ。

「でも遥がそんな勘違いをするなんてめずらしい。よっぽど優也のことが好きなんだと思うよ」

という高橋さんの言葉に、「まあ遥もお年頃だからなー」とのんきに相槌をうつのは佐倉家のお父さんだ。

遙ちゃんを溺愛するお父さんは最初こそ僕を敵視していたものの、いまでは惚れた弱みで佐倉孝明にいいようにされている僕に同情してくれているらしい。

でも「遥もお年頃だからなー」「孝明は遥が可愛くてしかたないからなー」ではあまり頼りにはなりそうもない。

いますぐにでも誤解をとくに行きたいのに、「遥がよく勉強してて助かるからいつそしばらく仲直りしないでって母さんが言うしなー」だし。

佐倉家さいあく。

はあ。

「声が聞きたい…」

「声くらい聞けば良いじゃん」

会いに行かずにどうやって聞くんだ。

「賢太に電話かけてもらえよ」

高橋さんの電話には出るんだ…。

分かってたことだけどへこむわー。

遥ちゃんが高橋さんを信頼しているのは当然だと思う。

理想のお兄ちゃんて理想のお父さんってカンジの人だし。

…現実がコレだし？

うちの父親も理想的とは言い難いから気持ちは良く分かる。

この人に大切にされているというのはギフトだ。

佐倉孝明までがその恩恵を授かっているというのだけが納得いかな
いけど。

「もしもし？賢太がかけてくるなんてめずらしいね。どうしたの？」

「ああ、遥の声が聞きたかったから？元気？」

「…。ホントはあんまり元気じゃなかったけど、賢太の声聞いたか
ら元気になった」

えへへ、とかわいらしく笑う遥ちゃんの素直な声にまたへこんだ。

こんな遥ちゃん知らないんですけどー。

「そうか。遥が少しでも元気になったんなら良かった。俺も嬉しい
よ」

「うん。ありがとう。賢太？…あのね、大好き
がーん。」

わかりやすくマズイという顔で電話を切った高橋さんを刺しても良
いですか？

たぶん僕が一生聞けないかと思ってるワードを簡単に聞いている
人がいたよ。

しょつく。

その後抜け殻のように過ごした数日間のことは記憶にない。

気がついたら遙ちゃんが目の前にいたので消えてなくならないように捕まえた。

抱きしめた手応えに気が遠くなりそうだった。

…逢いたかった。

ずっとずっと逢いたかったんだ。

「…先輩？」

遙ちゃんの声が直接聞こえるだけで泣きそうになる。

僕はどうしようもなく遙ちゃんが好きなんだ。

「…好きです。付き合ってください」

幻聴がするくらい好きなんだ。

…。

え？

と思う間もなくあざやかに僕の腕からすり抜けて走りさる遙ちゃん
の後ろ姿を呆然と見送った。

え？

逃げた？

え？

いまのリアルに遙ちゃんが言った？

え？

てか僕たちすでに付き合ってたないか？

え？

なんか言いたいことがやまほどあってわけわかんねえし。

着信拒否指定を外してくれたらしく電話が通じました。

「なんで逃げるの?!」

「襲われるかと思って」

…いつも思うけど、そのセリフをさらっと言えるんなら、口で拒否したら良いんじゃない？

べつに襲うつもりがないとまでは言わないけど、やだって言ってる相手に無理強いするほど鬼畜じゃないんだけど。

「私は子供なので先輩の望むような準備ができていません。…それでも付き合ってもらえますか？」

…。

これはあれか？遙ちゃんのなかでは好きだから付き合うつていうより、付き合ったらおいしくいただけるつていう認識なのか？そうなのか？だから僕たちは付き合つてないのか？誰だ？そんな間違つた認識を彼女に植え付けたのは？佐倉孝明か？彼はそんなに鬼畜な人間なのか？そうか？鬼畜なのか？まったく予想通りの鬼畜なのか？

「遙ちゃんが僕のことを好きってホント？」

大切なのはそのことだよ？

「…好きです」

言いながら遙ちゃんは泣き出した。

うわぁ、すげえ感動する。

いますぐ顔見たい。

「いまだどこにいるの？」

「わかりません。…迷子です」

…。

もう驚かないけどね。

「僕は遙ちゃんが好きだよ」

たぶん、遙ちゃんが想像している以上に。

「けっこうギリギリ耐えてると思う」

遙ちゃんの知らないところで、佐倉孝明に良いようにされたりして。

「でも、遙ちゃんが好きって言ってくれるなら、もっと頑張るよ？」
プライドとかいくらでも捨てられるし。

「…好きです」

泣いている遙ちゃんを誰よりも大切にしたいと思う。

「お手々つなごうか？」

おずおずと手を差し出す遙ちゃんがあんまり可愛くて、ついキスしてしまった。

人前でこんなことしたら怒るかなー？ってちょっと心配になったけど、遙ちゃんはお花が咲くみたいにふわりと笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0701z/>

君も僕の流星

2011年12月4日09時55分発行